亀卜（きぼく）の伝承 イカツオミ

【日本神話】 神功皇后

仲哀天皇の死に際し、神功皇后は自ら祭主となり、武内宿禰（たけのうちすくね）に琴を弾かせ、中臣烏賊津使主（なかとみのいかつのおみ）を、神意を解釈する審神者（さにわ）としました。（日本書紀）

【対馬の伝承・異伝】

神功皇后の外征を支えたのは、個性的で有能な家臣たちでした。特にイカツオミ（雷大臣）は、皇后の凱旋後に対馬に留まり、古代の占いの技術である亀卜を伝えたとされます。イカツオミはまず豆酘（つつ）に住み、次に阿連（あれ）に移り、加志（かし）で生涯を終え、加志の太祝詞神社（番号56）横に墳墓（中世の宝篋印塔）があります。

豆酘には亀卜が残り、加志の太祝詞神社は名神大社であり、阿連は「対馬の神道」の著者・鈴木棠三から「対馬神道のエルサレム」と称されるなど、イカツオミの痕跡が色濃く残されています。名称に「雷（霹靂）」「能理刀（のりと）」がつく神社では亀卜が行われていたケースが多く、全島に分布しています。

コラム　占いの変遷

古代において、作物の豊凶や天変地異、病気の蔓延等は、統治者の重要な関心事でした。場合によっては、統治者がその責任を負い、処刑されることもあったのです。

日本では、古くから鹿の肩骨を焼いて占う太占（ふとまに）が行われていましたが、対馬には5世紀頃、亀の甲羅を用いる亀卜が大陸から伝来していたようです。

律令時代（7世紀後半～）には、国家の吉凶を占う手法として亀卜が採用され、伊豆5人・壱岐5人・対馬10人の三国卜部（さんごくうらべ）が占いの職能集団として朝廷に仕え、重視されました。政祭一致の時代、対馬は占いのみならず、政治的な影響力も保持していたのです。

平安時代になると安倍晴明などの陰陽師（おんみょうじ）が活躍するようになり、さらに鎌倉時代になると武士が台頭し、対馬の卜部は力を失いますが、亀卜は対馬藩の公式行事として幕末まで存続しました。

ちなみに、亀卜に使うウミガメの甲羅は、阿連の大野崎沖で獲れるものが最上とされ、逆に佐護・木坂・豆酘沖のものは使わないなど、厳格なルールがあったようです。豆酘の亀卜は形を変えて現在も行われ、国の無形民俗文化財に指定されています。